



中山 光勝先生

故中山光勝教授を悼んで

仏教学部長 池 上 要 靖

「寡黙な方だな。」

平成二十七年一月二十日、その訃報は突然に届いた。前年末に入院をされた時には、それほど病状が悪化しているとはお聞きしていなかった。思えば、闘病の期間はすでに二十年近くに及んでいた。

身延山短期大学宗学科の講師として勤務されたのが昭和六十一年、小生の就職はそれよりも三ヶ年後の平成元年であった。先生の印象は、冒頭の一句の通りである。当時は、教員も職員も大部屋状態で、フロアに川の字に机を並べていた。小生の真後ろに中山先生の机があり、先生は朝から晩まで近代の法制に関する文書もんじょを開いては、黒ペンを走らせたかと思うと、赤ペンに持ち替え修正線を引き、また黒ペンを走らせるという日々を送っていた。ペンの音と、時折背伸びをしていた仕草が思い起こされる。先生は、よく出張にも出かけられていた。行く先は、決まって北海道の網走監獄（博物館）であった。その頃の小生は、「法制史」という学問分野の内容がよく理解できていなかったの
で、なぜそのような場所に行くのかを不思議に思ったものであったが、ある日、朝刊を広げてみると、『乃木希典全集』（全3巻、後に補遺が加わる）の宣伝広告が目についた。編者は中山先生であった。また、『北海道集治監論考』

故中山光勝教授を悼んで（池上）

故中山光勝教授を悼んで（池上）

の書名も見えていたので、平成十年ころであったろう。そのころには、法制史という学問もおぼろげに理解できていたので、それらの研究業績がどれほどであったかを承知することくらいはできていたと思う。

「寡黙」は、また「ひたむきさ」とも言い換えられるだろう。先生の学問に対するお考えの一端を、近隣の温泉宿に同宿させていただいた折にお聞きしたことがある。

「研究生生活の目標は、現役の時に論文を百編書き上げ、地に埋もれることがないようにその時代を浮かび上げさせることだ。」

慶応大学の手塚豊先生に師事された学風は、丹念に文書を読み解き、法制度の裏に隠された時代や人物の真実の姿を描き出そうとする営みであった。

平成五年の春から短期大学の改組が本格化していった。中山先生は、改組後の大学運営に欠かせないあらゆる規程作成に取り組んでおられた。法制史とは相容れないにも関わらず、文句や愚痴を聞いたことはなかった。その甲斐あって、平成七年四月には四年制大学への改組を成し遂げることができた。中山先生のご尽力により、現在の基盤が整備された功績は大きい。しかし、体調は反比例していった。投薬治療に臨まれ、決して良好とは言えないまでも、学内では学部長から学長へ、学外においても山梨県情報公開制度運営委員会長を務められ、社会的責務も十分に果たされた。惜しむらくは、研究者としてはこれからが円熟期を迎えられる時期に旅立たれたことである。四年制大学への改組から二十年、在りし日を偲びつつ、中山光勝先生、法号修学院日空上人の増圓妙道をお祈り申し上げます。